

# 国際日本研究 フェロウシップ ニュースレター

2016年6月発行 第3号

## ◎目次

招聘研究者が語る 日本での滞在研究	p.1
博報財団の研究交流の場	p.10
最近の招聘研究者一覧	p.11
海外における日本語教育と日本研究〈中国〉	p.12
本フェロウシップの受入機関	p.16
博報財団「国際日本研究フェロウシップ」	p.20

## 博報財団

HAKUHO FOUNDATION

子どもたちと、未来のあいだに

博報財団「国際日本研究フェロウシップ」は2006年の開始時から、海外で日本語・日本語教育に関する研究を行っている優れた研究者を日本に招聘してきました。滞在型研究の場を提供することで、世界における日本研究の基盤をより充実させ、海外の日本への理解を深めることを目的としています。2014年の第9回招聘からは、日本文学・日本文化領域も招聘対象とし、より広い範囲での日本研究と日本語教育の拡大と振興をめざしています。このニュースレターで、過去の招聘研究者インタビューや受入機関ごとの特徴紹介などから、日本で滞在型研究を行う魅力を感じていただきたいと思います。

Since 2006 the Hakuho Foundation Japanese Research Fellowship has invited international scholars of Japanese language and Japanese language education to Japan. The goal of the program is to enrich the foundation of international research on Japan and to promote a better understanding of Japan across the globe by providing opportunities for international scholars to live and conduct research in Japan. In order to promote a wider scope of research, the criteria of eligibility for the fellowship was expanded in 2014 to include research on Japanese literature and Japanese culture, in addition to research on Japanese language and Japanese language education. This newsletter includes interviews with former fellows and information on the characteristics of hosting institutions, as well as illustrating the various benefits and advantages of conducting research through an extended-stay in Japan.

## 日本を学ぶ、日本で究める

### 招聘研究者が語る 日本での滞在研究

博報財団「国際日本研究フェロウシップ」により日本滞在研究を行った研究者は、第11回までで32ヶ国・地域にわたり、研究者同士の連携を生み出している。ここでは、4人の招聘研究者の研究内容と日本滞在研究の成果を紹介する。

Over the past 11 award periods of the Hakuho Foundation Fellowships, scholars from 32 countries and regions have come to Japan to conduct research, generating scholarly cooperation. This section presents the various themes and outcomes of the research projects conducted in Japan by four former Hakuho Foundation fellows.



### 未踏の研究領域でフットワーク軽く

ブル・トゥルイ・リカル BRU TURULL Ricard  
Autonomous University of Barcelona, Spain

スペイン バルセロナ自治大学 美術史 客員教授  
バルセロナ市立世界文化博物館 総合内容コーディネーター

【研究タイトル】20世紀の日本とスペインの芸術関係について  
【招聘期間】2015年3月1日～2015年8月31日（第9回）  
【受入機関】国際日本文化研究センター

#### モデルニスモと 日本の民藝をつなぐ橋

東京、水戸、<sup>ましこ</sup>益子、<sup>しがらき</sup>信楽、北茨城、名古屋、大津、大阪、那覇、富山、高山、北海道……。これらは、ブル・トゥルイ・リカル先生が半年の招聘期間中に調査研究のために訪れた場所だ。ブル先生を知る人は口を揃えて「先生はフットワークが軽い」と言う。

ブル先生は本フェロウシップの第9回から募集が始まった日本文化研究領域を対



▶白老のアイヌ民族博物館で野本正博館長にインタビューするブル先生

象とする招聘研究者のひとりだ。先生はバルセロナ自治大学やカタルーニャ工科大学で、ヨーロッパの現代美術と世界文化美術、日本の縄文から明治大正にいたるまでの美術について教鞭をとるかたわら、フリーランスのキュレーターとしてスペインを中心にヨーロッパ各地の美術館の展示を企画するなど、じつにさまざまな分野で活躍されている。そのなかでも2015年にオープンしたバルセロナ市立世界文化博物館での企画に力を入れているという。

今回の招聘研究で、「20世紀の日本とスペインの芸術関係について」というテーマを選んだ理由を尋ねた。

「私の専門はモデルニスモ【脚註 19世紀末から20世紀初頭にかけ、バルセロナを中心としたカタルーニャを地方で流行した芸術様式】研究です。19世紀のカタルーニャのモデルニスモへの日本の影響については先行研究が少しありますが、20世紀のものについては誰も研究や調査をしていなかった。これはなんでもできそうな、すばらしいテーマだと思ったんです。たとえば、ジョアン・ミロのことは誰でも知っている。でもミロと日本の関係については、ほとんど知られていません。もしミロと日本の関係がわかれば、もっとミロの作品を深く理解できると思いませんか？」

たとえば、先生の研究に欠かせない、エウダルト・セラという人物がいる。カタルーニャ出身の彫刻家であり工芸家であるセラは、スペイン内戦を避けて、1935年から1948年まで日本に住んでいた。住友財閥の娘と結婚し、濱田庄司や柳宗悦（みんげい）などの民藝のグループと多く交流した。セラは世界文化博物館の前身となる民族博物館のために働いており、バルセロナに日本の民藝館を作りたいと言って、濱田庄司、藤原雄、村田元、荒川豊蔵などの焼き物や、大津絵、（びんがた）紅型といった民藝作品を買い求めた。世界文化博物館には日本で作られた作品が3800点ほどあるが、そのうちの60%以上がセラの蒐集した作品だという。セラのコレクションは範囲が広い

ため、その多くは、作者や制作年代が不明だ。それをブル先生は「ここからなんでも研究することができる」と言って目を輝かせる。

## セラとアイヌの関係を追って 旭川、白老、平取へ

セラは蒐集すると同時に、世界のさまざまな民族の顔の彫刻作品を自ら制作した。そのなかでブル先生が惹かれたのが、アイヌの人びとのものだという。「今回のフィールドワークには、ほとんど毎日発見があります。たとえば、セラの北海道日記。『私は昨日は大阪から東京に行った。その後白老町（しらおい）に行き、木下写真館の家に泊まって、その後写真を撮って……』。これはセラの家族の手元であって、誰の目にも触れていません。この研究にとってはすばらしい資料です」。

この日記や、世界文化博物館に収蔵されているアイヌのものと思われる民族衣装などの資料を携えて、北海道へ調査に行くというブル先生に同行させていただいた。

旭川市にある川村カ子トアイヌ記念館で、館長の川村兼一氏に写真を見せながら、話を伺う先生。衣装の写真を目にすると館長は「これは……ペラモンコロが作ったものだね」と教えてくれるように作者がたちどころに判明し、先生が「毎日発見がある」という現場を目の当たりにした。その後先生は平取町にも足を延ばし、実際に砂沢ペラモンコロ氏の制作した別の衣装を見ることができたという。他にも川村カ子トアイヌ記念館では、セラの写真に写っているアイヌの人びとの名前や、その家族の連絡先などが次々と判明したので、彼らを訪ねるため、セラの足跡を辿り白老へ向かった。

白老のアイヌ民族博物館で館長にインタ





▶ 招聘中にジャポニスム学会賞を受賞したほか、国立西洋美術館のシンポジウムでは基調講演を行った

ビューし、その日の午後には、旭川で連絡先がわかったばかりの、セラと親交のあった方のご家族にも面会し、そこからまた、セラの日記に出てきた「木下写真館」に勤める方へ繋がった。その方はなんと先生の宿泊する旅館の目の前に住んでいるということがわかり、夜遅くにもかかわらず、自宅に招かれ歓待を受け、セラの滞在時のエピソードを伺うことができた。

半年の滞在期間でこれほどのフィールドワークをこなす一方で、受入先である国際日本文化研究センター（日文研）での研究生活については「日文研は図書館がすばらしくて、民藝に関する文献や、ミロの滞日中の新聞記事など、スペインでは入手が難しい資料にあたれます。研究会では、世界中の研究者と意見を交わすことができました。また日文研は人里離れた場所にあるから、研究調査の環境としてすごくいいんです。フィールドワークに出れば、セラの家族や、ミロの日本の友人の家族、陶芸家やアーティストたちの家族と出会えたことがなんと言っても収穫で、何回か会って親しくなりました。私の研究は本当に楽しいことばかり。だからこのテーマを選んだとも言えます（笑）。いずれも、日本に来なけ



▶ 旭川の川村カトリアヌ記念館でのリサーチ

れば決して得られなかったもの。博報財団のフェローシップでは、研究者を信頼して、なんでもやらせてもらえるので、図書館にこもることも、フィールドワークに出かけることもできた。それがなんといっても魅力です」と語ってくれた。

## 文化研究から見る日本語の重要性

日本の美術について研究をするなかで、日本語が必要になったブル先生だったが、日本語学科で学んだ経験を持っていない。文化領域の研究者にとっての日本語の習得の必要性を尋ねた。

「スペインの日本文化研究者の多くは、残念ですが、私も含めて日本語はまだまだ話せません。たとえば私がキュレーターを務めた大英博物館の春画展では、日文研の先生方と日本語で会議をしなければなりません。私は2003年に専修大学で3ヶ月間勉強をして、その後は独学していますが、いまは会話よりも読み書きを重視しています。資料を読んだり、論文を書いたりするのが重要なので。ただ、会話は今回のような調査とコミュニケーションにとって、とても重要ですね。毎日が練習でした」。

ブル先生の受入担当であった日文研の稲賀繁美教授は、この半年間でのブル先生の日本語会話能力の目覚ましい進歩には驚かされたと言っている。

一次資料にあたるために読解力を重視しながらも、日本に滞在して研究するとともに会話力を習得できることも、日本文化研究者にとっての収穫だと言えるだろう。

## 多くの収穫を得て、帰国後も美術展の企画や論文構想が目白押し

ブル先生が半年間の滞在研究を終えて帰国したのは8月31日だが、9月中旬からスペインで開催された展示会の企画とその研究を、日本滞在中に進めていたという。「マヨルカ島でアングラダ・カマラサの展示会を開催します。アングラダはピカソと同時代のアーティストで、浮世絵を蒐集していました。歌川広重とアングラダの作品は、並べてみると関係性がとてもわかりやすいんです」。

この展示会の後には、アイヌとセラの関係に光を当てる小さな展示会を企画しており、おそらくヨーロッパでは初となる大津絵の展示会の企画も同時に進行している。



▶ 第9回招聘研究者の研究報告会

また、ブル先生は、大学で教える題材もたくさん得ることができたと喜ぶ。論文はもちろん、アメリカの美術雑誌や、バルセロナの日本文化に関する雑誌への寄稿も進めているようだ。

「いま進めたいと思っているのは、スペインのアーティスト達と行う、日本をめぐる大きな展覧会です。スペインと日本の両国で、2020年のオリンピックまでに開催できればいいと思っています。今回の日本での滞在研究では本当にたくさんの収穫を得ました。新しい資料、写真、手紙……。これから腰を据えてゆっくり研究したいです」。

## Exploring Untrodden Paths

Having traveled to over a dozen locations during his half-year research period in Japan, Professor Ricard Bru Turull has earned a reputation for conducting very active and extensive fieldwork. He has taught courses on modern European art, world cultural art, and Japanese art at the University of Barcelona and Universitat Politècnica de Catalunya, while also working as a freelance curator planning exhibits around Europe. As one of the first Hakuho Fellows to carry out research on Japanese culture since the topic became one of the eligible research criteria for the fellowship, he examined Japanese art's influence on Catalan Modernism in the twentieth century. His field trip to Hokkaido, on which he was accompanied by the interviewer for this newsletter, demonstrated the density of his research activities, which led to one discovery after another on a daily basis.

Professor Turull notes that his host institution, the International Research Center for Japanese Studies, had excellent libraries holding materials that are difficult to access from Spain, and offered opportunities to exchange ideas with scholars from across the world. One of the most appealing aspects of the Hakuho Fellowship to him was the extent of freedom afforded fellows in conducting research in their own research styles. Back in Spain, he continues his busy schedule of teaching, planning art exhibits, and preparing manuscripts for journal articles.

# 学問の原点を考える機会に

仁科陽江 Yoko NISHINA Erfurt University, Germany

ドイツ エアフルト大学 人文学部 教授

(元ボン大学 人文社会系アジア研究科 日本韓国研究専攻 教授)

[研究タイトル] 海外における日本語学研究

[招聘期間] 2014年9月1日～2015年8月31日(第9回)

[受入機関] 京都大学



▶鴨川沿いを自転車で京都大学へ

## 25年の海外での 研究生活から京都へ

鴨川沿いを自転車で颯爽と駆け抜ける仁科陽江先生。烏丸御池に借りている部屋から、受入機関である京都大学まで、古都の美しい街並みを眺めながら、自転車で通うのが日課なのだという。この日は受入担当教授である、人間・環境学研究科の西山教行先生ゼミに出席した。大学院生による「観光空間におけるハラル認証の言語表示」という発表があり、学生たちと活発な意見交換をし、言語学者という観点から、また海外から日本を見るという視点からも助言していた。

仁科先生は、大学院まで日本で過ごした後、ドイツに渡り、留学生活も含めると海外での研究生活は通算で25年を数える。「私は日本では国文科を卒業しているんです。それで傲慢にも日本語のことはわかっているつもりだったのが、ドイツに行って一般言語学を専攻して、根底から揺さぶられた。類型論などを専門にする研究者は日本語ができるわけではないのに、日本語独特の現象をすごくエレガントに説明するんです。日本語をまったくちがう観点から考えるようになったのが、私が日本語学の研究に携わった契機と言えます」。先生にとっての日本語は、一般言語学研究的対象となる言語のひとつであると同時に、その本質をもっとも明らかにしたいと

思っている言語でもある。先生は研究にくわえて、ドイツで日本語教育に従事しており、多くの日本語学習者とのかわりのなかで得た新たな知見も、日本語研究を後押ししているという。

## 日本人力アッププロジェクト

ドイツで長年研究をし、功績を上げている仁科先生が、それでもあらためて日本で滞在研究することには、どのような意義があるのかを伺った。

「浦島花子も玉手箱を開けないといけないということでしょうか(笑)。私は誰でも一度は海外に行くべきだと思うし、海外で



▶京都大学のカフェテリアで昼食

研究することには国内にないメリットもありますが、ずっと海外にしていると日本の情報は限られてくる。いまはインターネットがありますし、論文も電子化されたものも増えていますが、それでもやはり日本の図書館で片っ端から読めるというのはうれしいですね。流行語や若者言葉などはどんどん変化していくし、日本にいて生活している一コマひとコマが発見であり刺激であり貴重なデータであります。何よりも肌で感じるということが、書籍やインターネットの知識とは別のものだと痛感しました。博報財団のフェローシップは、まず第一に、言葉の研究を重視しているのがすばらしいと思います。第二は、国籍や年齢の制限がないということ。外国の研究機関に所属している日本人は損なところがあって、日本で滞在研究しようにもなかなか要件にあうフェローシップがないんです」。

仁科先生は1年間の滞在期間中に日本全国で開催された学会や研究会などに70



▶海外でも数多くの公演に出演する檀野未佳先生(生田流 箏末会主宰)と

回も出席する精力的な研究生活を送る一方で、京都という街での暮らしで「日本人力」の回復にも努めているのだという。北野天満宮のある上七軒で、箏曲演奏家でもある檀野未佳先生に三味線の手ほどきを受けているほか、生け花や着物のコーディネート講座などにも積極的に通っているそうだ。寺社仏閣めぐりはもちろんのこと、歌舞伎を鑑賞したり、句会にも参加しているという。「日本人の行動規範とはどういうものか、日本人は丁寧だと礼儀正しいと言われるけれど、それがどういうところに表れるかということ、海外にいるとつい忘れて見逃したりするので、やはり日本に戻ってリハビリをしないといけないですよね」。

### ハーフではなくダブル

仁科先生が今回の研究テーマを決めたのは、ひとつには、海外で日本学を専攻する人が日本語研究をするための基礎を整えること、もうひとつは日本語学専攻でなくても言語に関心の高い日本語学習者が言語研究をするための道しるべになるようなものを作ることを目指しているからだという。「教科書という広い分野のことを浅く広く簡潔にまとめているというイメージがあるので、ちょっと誤解があるかもしれないんですけど、問題意識を持ってひとつの事象から議論をひろげていくための出発点のようなものと考えています。たとえば日本人の母語話者が内省や直感で説明してきた動詞の用法を、ドイツでは非母語話者を対象にやり方を変えて発展させることができると思いますし、日本語教師の支援ができるのではないかと考えています」。

また、言語学と日本語教育という二つの視点から日本語を捉えてきた仁科先生は、

京都大学での研究で勇気づけられたことがあるという。「私自身の研究は言語学的な根本的な基礎研究ですが、日本語教師をやっている人たちは、現場ですぐに役立つものがほしいんですよ。残念なことに『文法はコミュニケーションの反対語』と捉える人もいます。そんななか、文科省の人文系学部の廃止を検討するような通達に対する京都大学の態度には、勇気づけられたというか励まされたというか。京都大学には学問の伝統と自由な学風があると感じます。学生も元気です。言語教育、日本語教育であったり、言語学一般、あるいは翻訳や異文化コミュニケーションなどにも応用がきく基礎研究を私自身がやっていたので、学問の原点を考える機会になりました」。

先生は、今回の滞在研究で得たことを活かして、日本とドイツ両方の研究・教育に貢献したいと語る。「滞在中にインプットしたものをアウトプットしようというのはもちろんですし、ドイツでは日本学を専門にして日本語を学ぶ、あるいは言語学を専門にして日本語を学ぶという、大きく分けて二つのパターンがあって、その両方に役立てるような研究を自分ができると思っています。また、集中講義のようなかたちで日本の大学で教えることもできるかもしれないし、前期はドイツ、後期は日本というふうに教えてもいいなと思うんです。ハーフではなくダブルというスタンスで、デメリットのように見えることをメリットにしよう。私にとってこの1年の日本滞在は、研究者としてもひとりの人間としても、今後の人生を決めたと思います」。



▶ 第9回招聘研究者の研究報告会で発言する仁科先生



▶ 重要な研究拠点である京都大学図書館

### Reconsidering the Roots of Learning

Having lived in Germany for twenty-five years, Professor Nishina found her long-term research in Japan to be a valuable opportunity that impacted her life on both scholarly and personal levels. Not only was she able to observe contemporary transformations in Japanese language firsthand and enjoy access to library resources, but she was also able to re-cultivate her own Japanese background. During her very active one-year research period, which included participation in seventy seminars and conferences, she also enjoyed the numerous cultural activities Kyoto had to offer. She notes that the mix of academic tradition and liberalism at Kyoto University, her host institution, also prompted her to reconsider the roots of “learning” itself.

Professor Nishina appreciated the Hakuho Fellowship's strong focus on Japanese language research. She also praised the fellowship for not setting restrictions on the nationality or age of applicants, as fellowship opportunities can be limited for scholars of Japanese background hoping to conduct research in Japan.

Based on her research in Japan, Professor Nishina hopes to create a Japanese language textbook that can help Japan Studies students build a strong basis in Japanese language, and can also be a guidepost for students of Linguistics interested in Japanese language.



▶ 京都大学 西山教行教授（言語教育・言語政策）のゼミ生との交流・助言

# 慣れ親しんだ街で暮らす喜び

グロスマン・アイケ・ウルスラ GROSSMANN Eike Ursula

University of Hamburg, Germany

ドイツ ハンブルク大学 人文科学部 アジア・アフリカ研究所 日本学科 助教授

〔研究タイトル〕 日本古典文学における子ども・児童観

〔招聘期間〕 2015年9月1日～2016年8月31日 (第10回)

〔受入機関〕 早稲田大学



▶ 図書館に隣接した研究室

## 日本語に一目惚れ

大学の最初の授業で、日本語には、ひらがな・カタカナ・漢字があるということを知って感動したというグロスマン先生。その晩、徹夜でひらがなを覚えたという。「そこからもっと勉強したいと思いました。昼間は大学で日本語を基礎から学び、夜は翻訳された日本文学を読みました。三島由紀夫や川端康成はもちろん、私が学生だった90年代は吉本ばななの『キッチン』が大ヒットしていました。遡って山東京伝など、翻訳されたものはとにかくひたすら読んで、朝起きてまた勉強して。それが日本文化への入口だったと思います」と語るグロスマン先生。その後古典文学、古典演劇へと関心を寄せていった。今回はドイツでの教授資格論文のために古典文学の中に新しいテーマを探そううちに、子ども史に辿りついたという。1960年代にフランスで書かれたフィリップ・アリエスの『<子供>の誕生』以降、子ども史の研究にあまり進歩が見られないように感じ、自身のいままでの研究に近い領域で子どもについて研究しようと思ったのだそう。「博士論文では古典演劇の儀式や儀礼に着目を置きました。いまは受入機関の竹本幹夫先生という相談して、演劇における子どもについて研究する基礎として、平安時代の文学や資料をあたって子どもの社会的地位を調べています」。

## 宿舎・研究室・図書館

グロスマン先生の宿舎であるSTEP21は早稲田キャンパスにほぼ隣接している。受入機関である早稲田大学が、訪問学者・リサーチフェローとして滞在する研究者に提供する宿泊施設のひとつだ。家具・寝具・電気製品・食器等が備え付けられていて入居と同時に生活がスタートできる。

宿舎から、キャンパス内を歩いて3分のところに中央図書館があり、先生の研究室も同じ建物にある。

「とても快適です。図書館には完璧と言っていいほど資料が揃っていますので、一度だけほかの大学から論文を取り寄せただけで、ほかのものは全てある。研究室から、寒い冬でもそのままエレベーターで降りて図書館に行けるといのは本当に贅沢なことです」。

先生が早稲田大学に滞在するのは実は2回目になる。博士後期課程を、今回の受入担当でもある竹本幹夫先生のもとで、2005年～2009年の4年間学んだ。「博士課程を取得してドイツに帰国

した際は、もう長く日本に来られないんじゃないかと思ったんですけど、このフェローシップのおかげで、また新しい自分や、自分の研究を見直すことができるととても幸せです」。夕方からの竹本先生のゼミにも出席。この日は金春禅竹の「円満井座壁書」の精読に取り組んだ。

## 休日の過ごし方

「朝起きてそのまま研究室に行き、図書館に降りたり研究室に戻ったりして、一日が終わると、今日は誰とも喋ってないと思う日もあります。私はお喋りが好きなので、休日は誰かと会って美味しいものを食べながらお喋りをする事が多いです。それと、散歩が好きなので、元旦には宿舎から東京駅まで、写真を撮りながら歩きました」。グロスマン先生は、ほかにも週に2回、太極拳に通っている。「からだを動かして新しいことを学ぶのも喜びですが、太極拳でいちばん感動したことは、そこにいる日本人にオープンに歓迎されていることなんです。今回の滞在は、日本人とともに日本に生活しているという実感がありません。いろんな人と触れ合ってお話する機会ができてとてもうれしいです」。

高田馬場から早稲田には飲食店も充実していて、グロスマン先生はいくつか行きつけの店もあるのだという。「銀だらの西京焼きが好きなんです。お行儀が悪いです、食事をしながら宮部みゆきを読んだりしています」。研究対象は古典文学だが、現代の日本語にも習熟するために、現代文学を読むのだそう。また、ドイツで日本について教える立場として、いまの日本をできるだけ知るために、この1年間は積極的にニュースを見て、新聞記事もコピーし、教材になりそうなものを集めているという。「たとえば芥川・直木賞の発表がち



▶ 早稲田大学の竹本幹夫教授（能楽・古典演劇身体論）のゼミ

ようどニュースになっているので、受賞者の作品を読んで翻訳の授業に使えるかなと考えたりしています」。

## 日本でしかできないことを

大学2年生のときに同志社大学に留学したグロスマン先生。ホームステイで半年間日本の家族と生活できたことがとても良い体験だったという。「ただ言葉ができて、完璧な文章になっていても通じないときもあります。その国に住んでいる人たちの生活がわからない限りは会話はあまり成り立たない気がします。ホームステイして、日本人はだいたい朝起きてこういうものを食べて、こういう一日を過ごして、夜はこう……ということのひとつの家族で経験できて宝物になったと思います」。

2回目の日本への留学の際に、ドイツの教授に「1年間はすごく短いから必要な文献をコピーしてその場でドイツに郵送しなさい。日本にいるあいだは、演劇を見て、いろんな先生の授業を受けるということを優先的にやりなさい」と言われたことが印象的だったと語るグロスマン先生。「いまはもちろんしっかり文献も読んでるんですけど、ある程度これは溜めておこうという感じでコピーしてそのままドイツに送ることもあります。雑誌に出ている研究論文はドイツでも手に入りにくい。最先端の研究成果もドイツにいるあいだに把握しているつもりではいるんですけど、日本に来てみたらそんなに把握できていないということがわかりました。日本の研究者はいま何が気になっているか、どのテーマをおもしろいと感じているかということを知りたくて、日本で行われている学会、研究会にも積極的に参加しています」。



▶早稲田キャンパスに隣接しながら静かで快適な宿舎

今回の滞在では他大学とも交流したいという意気込みを語っていたグロスマン先生。法政大学の能楽研究所で英語版能楽事典を作るプロジェクトにも参加しているのだという。「おもしろいのは、事典を作るときに日本人の研究者と外国人の研究者をペアにして二人でひとつの項目を書き上げることです。私は法政大学の宮本圭造先生と『能の歴史』を担当することになりました。いろんな研究者と交流ができて刺激的な経験です」。グロスマン先生は、ヨーロッパの日本学はもっと日本の研究者との交流を進める必要があると感じている。「日本語・日本学の研究で、ヨーロッパから遠く離れた日本という異文化と触れ合うことは、自分の国のこともより良く理解することに繋がるのではないかと思います。積極的に交流をもって、一緒にどう研究ができるのかを探っていきたいです」と語ってくれた。



▶グロスマン先生の研究資料

## *The Joy of Returning to a Familiar City for Further Research*

Professor Grossmann has been conducting research on concepts of childhood in classical Japanese literature for her professorial thesis (Habilitationsschrift). To explore the notions of childhood in classical theater, she has examined literary and historical materials concerning the social status of children in the Heian period.

In the past, Professor Grossmann studied at Doshisha University as an undergraduate exchange student, and spent four years as a doctoral student at Waseda University. Her current host scholar is also her former advisor at Waseda University. She appreciates the opportunity provided by the Hakuho Fellowship to return to Japan for long-term research, which has allowed her to reexamine her research and herself on both a scholarly and a personal level.

Professor Grossmann enjoys the rich resources available at Waseda University's libraries, including scholarly articles that are difficult to obtain in Germany, as well as potential instructional materials, such as newspaper articles, for her courses in Germany. She also participates in a project at Hosei University to compile an English handbook of Noh, which has enabled her to have stimulating scholarly exchanges with a wide range of researchers in Japan. She hopes for a further expansion of scholarly exchange and collaboration among Japan Studies researchers in Europe and scholars in Japan.



▶豊富な資料が揃う早稲田大学中央図書館

# 言語学の知見を活かした教科書作成を目指して

ケーオキッサダン・パッチャラポーン

KAEWKITSADANG Patcharaporn Thammasat University, Thailand

タイ タマサート大学 教養学部 日本語学科 助教授

【研究タイトル】 Can-do をベースとしたコミュニカティブ日本語教育及び日本語教科書の調査研究  
——タイの高等教育機関における日本語教科書作成への応用の可能性

【招聘期間】 2015年9月1日～2016年8月31日（第10回）

【受入機関】 東京外国語大学



▶ 第10回招聘研究者の研究報告会

## 日本語学から見る日本語教育の難しさ

ケーオキッサダン・パッチャラポーン先生は、タマサート大学で日本語学を研究しながら、同時に日本語教育にも携わっている。日本語教育以外の専門の教師が大学で日本語を教える難しさを次のように語ってくれた。

「教師になって1年目は、自分が何を教えられるかがわからず苦しかったです。もちろんアウトラインやシラバスの目標はあるんですけど漠然としていて。何年目かの1年生の授業では、4年生の授業と同じ速さで日本語を話してしまい『新幹線先生』というあだ名をつけられました（笑）。空気のようにやっていたら、学生もできるようになるよ、という暗黙の了解のようなものはあったんですが、私のような新人にはそういうことができませんでした。日本語学研究者や日本文学、文化の研究者といった、日本語教育を学んでいない専門外の教師のために、きちんとした目標設定があればと思ったんです」。

教え方、学び方、学習成果の評価の指針を据えたスタンダードを軸に、日本語を勉強して最終目標として何ができるようになるかという Can-do（共通評価指標）を利用するのが現在の日本語教育の主流となりつつあるが、タイの日本語教育にはまだこ

のシステムが導入されていない。

パッチャラポーン先生が今回の滞在研究でスタンダードと Can-do の策定を進めることは、タイの日本語教育にとって革新的なことと言えるだろう。

## 学生の視点に立って学ぶ

受入機関の東京外国語大学（以下東外大）の JLC（留学生日本語教育センター）では、JLC 日本語スタンダードにもとづいた Can-do を策定しており、それを実際に使った授業を行っている。先生はその授業を学生と同じ席で聴講している。ほかにも、調査研究として、筑波大学やお茶の水女子大学などの日本語教育の関係者にインタビュー調査を行い、授業も見学した。タイにいるときには常に教育者の視点で考えていたために気づかなかった点を発見できたという。

「学生と同じ席で講義を聴いていると、初心に戻って、教えられる側の立場で考えることができたんです。とくに初級の教科書では、タイにいるときにはわからない、最新の注意事項がわかってよかったです。文法項目が同じでも、教え方や、注意する点が全然違うことなども、教材作りの大きなヒントになりました」。

## ふたつの再会

出張ではほぼ毎年日本に来るというパッチャラポーン先生だが、長期にわたっての滞在は約10年ぶりになるという。今回調査研究のために訪れた筑波大学では、京都大学に留学していた際の同級生、李在鎬先生に再会した。李先生は博報財団の別の研究助成プログラムを受けたこともあり、現



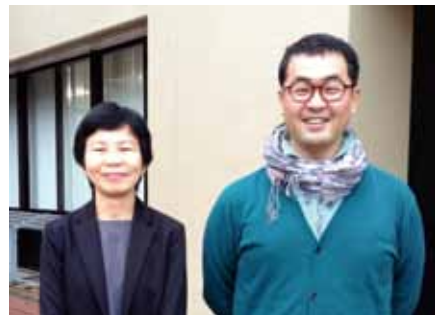
▶ 調査研究のため筑波大学へ

在は筑波大学で言語学・認知科学の准教授を務めている。

「京大のときには専攻が違ったため、タイに戻ってからのやりとりはなかったんです。それが今回筑波大学に行ったとき、その担当者が李在鎬先生だったんです。私の調査に対してとても丁寧に親切に対応していただいて『10年ぶりにこんなかたちで会うのも意外ですねえ』と。それから彼が主催する勉強会にも誘ってくださったりもして。日本語教育のことなど、意見交換したりもしています」。

また、東外大のタイ語学科に所属するウィッタヤーパンヤーン・スニサー先生は慶應義塾大学に留学していた際の先輩だそうだ。

「スニサー先生がこちらで教えていらっしゃるのも知らなかったんです。『タイ語学科にはこういう先生がいますよ』と教えられてびっくりしました。15年ぶりです。今日もお昼ご飯を一緒に食べながら、タイ語学科でも Can-do を作りたいと言っているみたいでなにか協力できないかと。もちろん、私でできることがあればというお話をしていました」。



▶ 筑波大学の李在鎬准教授（言語学・認知科学）と



## 実践の場でも役立つ教科書を

パッチャラポーン先生は、タイ国内で4年間日本語を勉強した卒業生への聞き取り調査も行っているという。先生の所属するタマサート大学の日本学科の学生は、学部卒業後約8割が日系企業に就職するそうだが、仕事で使う技能としては、「書く」よりも「話す」ほうが割合が高い。「従来の教科書だとやはり「読み書き」が中心になっていますが、あらたに作る教科書では、こうした実際のニーズに合わせた構成も必要ではないかと思えます」。もうひとつ特徴的なのが「翻訳」だ。税関についてやタイの制度の翻訳が、就職した企業では実際に求められているということが、調査からわかった。「翻訳というのは大学院レベルの話なので学部には一つの授業があるのみなんですけど、4年間学んだ後に社会に出て、やらなければならないなら、最初から少しずつテキストに入れるのもいいのではと考えています。自分自身の言語にも意識を持つことになりすし」。

タイではほとんどの大学で日本で出版された教科書を使っている。先生が学生時代に使っていた教科書が現在も使用されているという。「いいものなので使い続けたという面もありますが、現在求められていることを考えると、カリキュラムの目標とも合わないこともあるし、高等教育でのタイ人向けの教科書はないに等しいという状況です。自立して、自分たちの教科書を作らなくてはいけない時期が来ているのだと思います」。

先生が作成しているスタンダードとCan-doを見せていただいた。「受入担当の

坂本恵先生にも見ていただきながら、滞在中にもっと手を入れる予定です。教科書も同時並行なんです。Can-do、スタンダードに変更があれば、それに従って作っている教科書にも手を入れる。です。滞在研究が終わるころには教科書案もできあがっていることになります。帰国したらすぐさま使ってみます。自分の授業で1年間テキストとして使い、終わったら評価してもら。次の年に改訂版を試作して、使ってみて評価してもら。3年目で出版できればと思っています」。

言語学の知見を生かした、実践の場でも役立つ教科書の完成がいまから楽しみです。



▶東京外国語大学のウィットヤーパーンヤーン・スニサー特任准教授（タイ語教育）と

Can-do  
日本語能力

レベル	読解	読み方	品詞	意味
1	単語	ひらがな	名詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
2	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
3	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
4	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
5	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
6	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
7	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
8	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
9	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
10	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
11	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
12	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
13	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
14	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
15	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
16	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
17	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
18	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
19	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
20	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
21	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
22	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
23	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
24	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
25	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
26	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
27	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
28	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
29	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
30	短文	ひらがな	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。

## Creating a New Textbook for Undergraduate Students in Thailand

Professor Patcharaporn specializes in research on Japanese linguistics, and is also active in Japanese language instruction at Thammasat University. In the field of Japanese language instruction, the use of “Can-do” benchmarks based on common standards with guidelines for teaching, learning, and evaluation has become mainstream. Professor Patcharaporn’s research in Japan is focused on creating a Japanese language textbook, while drawing up common standards and “Can-do” benchmarks for Japanese language instruction in Thailand.

Her host institution, the Japanese Language Center for International Students (JLC) at Tokyo University of Foreign Studies, uses “Can-do” benchmarks in its Japanese language instruction. Professor Patcharaporn audited the courses at JLC, and conducted interviews and classroom observations at University of Tsukuba and Ochanomizu University. These activities allowed her to recognize issues she had not been aware of while teaching in Thailand.

Approximately eighty percent of students who graduate from the Department of Japanese at Thammasat University go on to work at Japanese corporations. Their work requires speaking and translation skills more than the reading and writing skills that conventional Japanese language textbooks focus on. There is also a serious lack of Japanese language textbooks for higher education in Thailand. Therefore, Professor Patcharaporn aims to create a textbook that prepares students for their future real-life needs.

目標	各項目目標	場面	Can-do	読解	読み方	品詞	意味
1	日本語についての知識を得る。文字(ひらがな-カタカナ)の読み書きができる。	日本語の文字・発音システムを理解することができる。ひらがな-カタカナの読み書きができる。	自分のことを初めて会う人に紹介することができる。	日本語の発音を聞き分けることができる。タイ人にとって難しい発音の聞き分け。	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。	名詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。
2	自分自身の身元や場所について、非常に基本的な表現を使って紹介ができる。	新しい日本人の友人との日本語の授業。日本人学生に出会った時の自己紹介。タマサート大学を日本人の友達に案内する。	存在文、何が、どこにあるかが分かる。	相手の自己紹介が分かる。先生の簡単な指図・説明が分かる。	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。簡単な文章を音読みすることができる。先生の指図に対して適切な応答表現ができる。	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。自分の大学について話すことができる。何が、どこにあるかが説明できる。
3	また、非常に基本的な質問をしたり、答えたりできる。	自分の日常生活・習慣について話すことができる。	なぜの質問文がわかる。	自分の生活について話すことができる。原因・理由を表す文で話すことができる。	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。簡単な文章を音読みすることができる。何が、どこにあるかが分かる。130の要点が分かる。漢字10字読むことができる。	動詞	ひらがな-カタカナ、単語を音読みすることができる。何が、どこにあるかについて説明することができる。簡単な文章を音読みすることができる。何が、どこにあるかについて説明することができる。130の要点が分かる。漢字10字読むことができる。
4		買い物ができる。	店で日本人と買い物。	数字・値段を聞き取るすることができる。	数字・値段を聞くことができる。買いたいものについて話すことができる。	数字	数字・値段を聞くことができる。買いたいものについて話すことができる。数字の漢字を読むことができる。
5		好物や趣味について話すことができる。	友達の好きな食べ物について話せる。	相手の趣味などについて話せる。	自分の趣味などについて話せることができる。面白い表現を使って友達を驚かすことができる。持ち合わせ時間・場所などについて話せることができる。	動詞	自分の興味のある分野の文章を音読みすることができる。何が、どこにあるかについて説明することができる。日本の家族についての紹介文を音読みすることができる。漢字20字読むことができる。
6	非常に基本的な表現を使って、自分自身の身元の日本語生活について非常に簡単な情報を述べたり、日本の活動に誇りを示したりすることができる。	家族について話す・聞くことができる。	自分の家族について説明する。	自分の家族について話せる。	自分の家族について話せることができる。	動詞	自分の家族について話せることができる。自分の家族について話せることができる。漢字20字読むことができる。

▶初期段階のスタンダードとCan-do。研究中に改稿が重ねられる

# 博報財団の研究交流の場

2015年度、招聘期間中に博報財団が提供した研究報告会等のイベントをレポートする。

This section describes the events held in 2015 for the Hakuho fellows.

## 懇談会・懇親会(10月)

博報財団は、招聘開始から1ヶ月後の10月に、滞在研究を始めたばかりの招聘研究者と、審査委員、受入機関の関係者が一堂に会する懇談会・懇親会を提供している。招聘研究者は、自己紹介、研究概要、滞在研究の抱負や、自国における日本語教育、日本研究の現状などを個別に発表する。審査委員は、研究領域に



応じた具体的な助言を寄せて激励した。そして、受入機関からは、研究活動への期待の言葉のほかに、他の受入機関の招聘研究者も参加できるイベントや講演会などが紹介された。

その後、立食形式で、研究者同士、あるいは受入機関、審査委員との親睦が深められた。

## 研究報告会(2月・8月)

それぞれの招聘研究者が滞在期間中に行った研究活動や研究の成果を発表する研究報告会を、毎年2月と8月に開催している。受入機関の担当の先生から補足の説明もあり、その後に審査委員の講評が伝えられる。2015年8月に開催された第9回招聘の研究報告会では、あらたに日本文学・日本文化領域が対象領域として加わったことで、多様な研究のかたちが提示され、このフェロ



ーシップを通じて、日本語・日本語教育研究とさまざまな日本文化の研究とが相互に良い影響を与え合い、発展していくことが期待された。また、日本語教育研究では、特にeラーニングで、招聘研究者同士、国を超えて、それぞれ帰国後に協力しあったり、共同研究をするという具体的な展望も話し合われた。

報告会後の懇談の場では招聘研究者、審査委員、受入機関の担当者らで、研究領域を超えた有意義な交流がはかられた。

## Roundtable Meeting, Reception, and Research Report Meetings

A roundtable meeting and a reception are held every October for new fellows. Fellows describe their backgrounds and research, while selection committee members and representatives from hosting institutions give welcome speeches and provide information on various events the fellows can attend during their research periods in Japan.

Research report meetings are held twice a year, in February and August. With the addition of new fellowship research criteria in Japanese literature and culture, there were discussions on a diverse range of topics at the August 2015 meeting. The event demonstrated the prospect for positive interaction among the fields of Japanese language, language education, and Japan Studies, as well as possibilities for future collaborative research among fellows after they return to their home institutions.



▶第10回招聘では財団の母体である(株)博報堂の本社訪問を行った。招聘研究者と財団の成田理事長(博報堂 取締役会長)

## column 過去と現在の招聘研究者との交流

2015年10月に開催された第10回招聘の懇談会・懇親会では、第5回招聘研究者だったロイ・レスミー先生(カンボジア 王立プノンペン大学日本語学科長)が、特別ゲストとして参加した。帰国後のカンボジアでの活動や現在の日本語教育事情について語ってくれた。また、第10回の招聘研究者に激励の言葉を贈った。当時のレスミー先生の受け入れ担当であり、第10回招聘の富田直子先生の受け入れも担当している佐々木泰子教授(お茶の水女子大学 日本語教育・日本語学)に4年ぶりに再会した。今回、レスミー先生は、昭和女子大学の博士課程での論文執筆を目的として日本滞在中のころ、財団の招聘研究者の先輩として参加していただいた。招聘研究者には本フェローシップの招聘終了後も、滞在期間に得たネットワークを活用して研究の幅が広がることを願っている。

## An Occasion for Interaction among Former and Current Fellows

Ms. Loch Leaksmy (Head of the Department of Japanese, Royal University of Phnom Penh, Cambodia), a former Hakuho fellow, attended the roundtable meeting and reception in 2015 as a special guest. She described her activities after returning to Cambodia, and the current condition of Japanese language education in the country. At the time, she was in Japan to submit her doctoral dissertation at Showa Women's University. Likewise, many former fellows return to Japan for further research, building on networks they established during their award periods.




▶ゲスト参加のロイ・レスミー先生とお茶の水女子大学の佐々木泰子先生


# 最近の招聘研究者一覧

## 第10回招聘研究者 招聘期間 2015年9月1日～2016年8月31日


研究分野：日本語・日本語教育研究（7人）




**ヴァシレヴァ マグダレナ ニコロヴァ**  
VASSILEVA Magdalena Nikolova  
〈ブルガリア〉ヴェリコ・タルノヴォ総合大学 助教授  
文化に焦点を当てた「総合的日本語教育」の実践及び方法論に関する調査研究  
——ブルガリア人日本語教師のためのテキスト作成  
早稲田大学 2016/3/1～8/31〔短期〕



**カナスギ ペトラ**  
KANASUGI Petr  
〈チェコ〉カレル大学 哲学部 東アジア研究所 日文学科 助教  
チェコ語・日本語における限定連体修飾の形態と捕らえ方  
お茶の水女子大学 2015/9/1～2016/8/31〔長期〕




**グエン ビック・ハー ティ**  
NGUYEN Bich Ha Thi  
〈ベトナム〉貿易大学 日本語学部 言語学部長  
論文形式文章作成のための日本語教育  
——ベトナム人の文化的特性による語彙の選択と構文  
国立国語研究所 2016/3/1～8/31〔短期〕




**ケーオキッサダン パッチャラポーン**  
KAEWKITSADANG Patcharaporn  
〈タイ〉タマサート大学 教養学部 日本語学科 助教授  
Can-do をベースとしたコミュニカティブ日本語教育及び日本語教科書の調査研究——タイの高等教育機関における日本語教科書作成への応用の可能性  
東京外国語大学 2015/9/1～2016/8/31〔長期〕



**鶴谷 千春**  
TSURUTANI Chiharu  
〈オーストラリア〉グリフィス大学 准教授  
丁寧表現における日本語プロソディの研究  
——より効率的なコミュニケーションのために  
国立国語研究所 2015/9/1～2016/2/18〔短期〕



**富田 直子**  
TOMITA Naoko  
〈ドイツ〉ハイデルベルク大学 ドイツ語学・ドイツ語教育学研究所 非常勤講師  
談話・テキストレベルの情報構造の日独比較・対照研究  
——心理言語学の立場からの中上級レベル談話指導に関する提案に向けて  
お茶の水女子大学 2015/9/1～2016/2/29〔短期〕




**ホーン スティーブン ライト**  
HORN Stephen Wright  
〈イギリス〉オックスフォード大学 東洋学部 助教授  
近世以前の日本語の通時コーパスの統語情報付加  
——言語学研究の実用に向けて  
国立国語研究所 2015/9/1～2016/8/31〔長期〕


研究分野：日本文学・日本文化研究（6人）



**グエン ラン・アイン ティ**  
NGUYEN Lan Anh Thi  
〈ベトナム〉ハノイ大学 日本語学部・日本文学文化学科 副学部長  
ベトナム人日本語学習者に向けた日本事情教材作成  
国際日本文化研究センター 2016/3/1～8/31〔短期〕



**グロスマン アイケ ウルスラ**  
GROSSMANN Eike Ursula  
〈ドイツ〉ハンブルク大学 人文科学部  
アジア・アフリカ研究所 日文学科 助教授  
日本の古典演劇、とりわけ能における子ども観  
早稲田大学 2015/9/1～2016/8/31〔長期〕



**フレデリック セーラ アン**  
FREDERICK Sarah Anne  
〈アメリカ〉ボストン大学 准教授  
川端康成「古都」地図  
——京都文学とデジタル・ヒューマニティーズ  
立命館大学 2016/3/1～8/31〔短期〕



**ホームバーグ ライアン エリック**  
HOLMBERG Ryan Eric  
〈イギリス〉セインズベリー日本藝術研究所 客員研究員  
劇画ポップス  
——戦後日本のマンガにおける美術と大衆文化の交流  
早稲田大学 2015/9/1～2016/8/31〔長期〕



**ラリ セシル**  
LALY Cecile  
〈フランス〉パリ・ソルボンヌ大学  
極東研究センター (CREOPS) 博士研究員  
胤物語  
国際日本文化研究センター 2015/9/1～2016/8/31〔長期〕



**レディ シュリーディーヴィ**  
REDDY Sreedevi  
〈インド〉CMR 教育機関および CMR 大学 非常勤准教授  
近代・平和主義・戦争協力  
——長谷川時雨を中心に  
京都大学 2015/9/1～2016/8/31〔長期〕

## 第11回招聘研究者 招聘期間 2016年9月1日～2017年8月31日

研究分野：日本語・日本語教育研究（6人）

葛 茜	中国	中国人日本語学習者の文化的アイデンティティの形成に関する研究 ——中国人留学生と中国本国の日本語専攻生との比較を通して
玉 栄	中国	コーパスを利用した日本語、モンゴル語の韻律特徴の対照研究
ダワー オユンゲレル	モンゴル	日本語教育における批判的思考力の育成の検討
張 恵芳	中国	モダリティ形式の会話における表現機能の日中対照研究
塚田 公子	オーストラリア	異言語話者による日本語発音習得に関する縦断的比較研究
ラングトン ナイナ ジーン	カナダ	オンライン「初歩日本語クラス」で使用する学習オブジェクトに向けたベストプラクティスの調査

研究分野：日本文学・日本文化研究（7人）

グエン オウイン ティ	ベトナム	日本とベトナムの漢文訓読の比較研究——「日本霊異記」と「今昔物語集」を中心に
グエン ニュー ヴー・クイン	ベトナム	ベトナムにおける日本語文化・文学の教育および研究の充実を図る授業および教材研究
クローブコヴァ ナターリア フォードロヴナ	ロシア	日本における正教会の聖歌とその発生、発展、特徴
ジェルリーニ エドアルド	イタリア	文学は無用か「不朽の盛事」か——平安朝前期に見る「文」の社会的役割とその世界文学における位相
石 立善	中国	日本所蔵漢籍古抄本に関する総合的研究
ディンスキー マイケル ジョセフ	アメリカ	現代日本における見習いからマスター・クラフツマンへの成長プロセス——グローバル化時代のクリエイティブ産業における伝統芸能とモノづくり
ベルランゲ・ 河野 紀子	フランス	幕末・明治初期の「人民の権利」概念形成における伝統的法政文化と西欧思想の相互影響過程——初代司法卿江藤新平とその周辺

# 海外における日本語教育と日本研究

博報財団は2006年の本フェローシップの開始以来、海外で日本語・日本語教育研究および日本文学・日本文化研究に携わる研究者を日本に招聘して、支援しつづけている。研究者の出身・所属は世界的な広がりを見せる。その研究テーマも手法も多様だ。いま、世界各地でどのような研究が行われているのか。また、日本での滞在研究の意義について、毎年各国の日本研究者にインタビューしてきた。今号では世界で最も日本語学習者が多い中国を取り上げる。北京日本学研究中心長、中国日語教学研究会会長、北京外国語大学教授を兼任する徐一平先生にお話を伺った。

The Hakuho Foundation Japanese Research Fellowship has invited scholars of Japanese language, language education, literature, and culture from around the world to conduct research in Japan. The regional and disciplinary backgrounds of the fellows have continued to diversify, and so have the themes and methodologies of research supported by the fellowship. This edition of the Hakuho Foundation Japanese Research Fellowship Newsletter focuses on China, which is home to the largest number of students of Japanese language in the world. We interviewed Professor Xu Yiping from Beijing Foreign Studies University, who is the director of the Beijing Center for Japanese Studies, as well as the chairman of the China Japanese Education Association.

## 質の高い日中の共同事業

徐一平先生がセンター長を務める北京日本学研究中心は、日本の国際交流基金と中国教育部（教育・言語・文字事業を管轄する行政部門）との共同事業として、中国における日本語・日本研究を目的に1985年に設立された。徐先生自身も同センターの前身である「大平学校」で学んだひとりだ。センターの成り立ちや役割について詳しくお話を伺った。

「1979年に当時の大平正芳首相が中国を訪問した際に、日本政府と中国政府との間に文化交流協定が調印されました。そのなかの一つの項目として、日本から専門家を派遣し、中国全国から日本語教師を集めて教師研修のかたちで再教育をする。これが

センターの前身の全国日本語教師研修班で、1年120名、5年間600名という計画でした。当時の600名とは、中国の日本語教師ほぼ全員にあたります。これが非常に成功して、親しみをもって『大平学校』、中国語では『大平班』と呼ばれました。このプロジェクトがこのまま終わるのはもったいないとお互いに認識して、もう少し大学院の学歴に繋がるような教育ができないかということで成立したのがいまのセンターです。

日中の共同事業として運営されている利点はいくつもあるという。設立初期の段階では中国側のスタッフがそれほど成長していなかったが、日本から金田一春彦氏や水谷修氏、北原保雄氏といった名だたる言語学者・研究者が、多いときは年間二十数名も派遣されていた。現在では日本側の主任教授を置いて、日中のスタッフが一緒に教えている。日中共同で運営面、教育面について協議しながら進めており、日本からの長期滞在の教授は、個人の研究領域を考えて、日本研究の先生はもちろんのこと、更に中国研究や比較対照研究を専門とする先生が多いそうだ。先生はこのことも両国の相互理解に役立っていると考えているのだという。「日本に留学してもなかなか教わるできないような大先生の講義を受けているのだと、いつも学生に話しています。日本と中国はいまでも複雑な問題を抱えています。このプロジェクトはどんな波風があっても揺れることはなかったんです。両国の文化交流でいちばん歴史が長く、最も成功した事例ではないでしょうか。」

センターは修士・博士課程の大学院コースで構成されており、大学で日本語を勉強したうえで、日本について研究しようとする大学院生を募集している。在籍中の日本研修制度があり、17万冊もの日本研究に関する図書を擁する中国随一の図書館があるため、30数名の定員に対して、応募人数は200～300名と、学生



▶北京日本学研究中心外観 写真提供：国際交流基金



▶北京日本学研究中心設立時の集合写真（1985） 写真提供：国際交流基金



▶中国で随一の蔵書数を誇る日本研究専門の図書館

の質が非常に高いのも特徴だという。「非常に意欲の高い学生が多いです。日本からの先生方にはこの学生たちと議論するのがおもしろいと、何度も希望して派遣される先生もいらっしゃいます」。

また、在学中の留学制度では、他の大学機関では交流協定のある大学にしかいけないのが通例だが、国際交流基金の支援でどこでも希望の大学に留学できることも、共同運営の強みだと語る。

センターは2015年に設立30周年を迎え、大規模な国際シンポジウムのほか、全国の日本語教師の研修会など、日本語教育関係のイベントに留まらず、浪曲や、裏千家と協力した記念講演やお茶のデモンストレーションなども開催されたという。また、交流を持ち続けている大平財団とも翻訳記念出版行事と記念講演会を行うなど、1年を通じてさまざまなイベントが開催された。

北京日本学研究中心

▶設立30周年にあたる2015年には、数々の日本文化、日本語研究の記念イベントが開催された

## これからの外国語大学のありかた

徐先生は北京日本学研究中心長を務める傍ら、同時に北京外国語大学でも教鞭をとっている。中国には北京のほかに、上海、天津、大連、西安など10ほどの外国語大学があるが、北京外国語大学の特徴は、あまり多くの学生数をとらないことだという。「多いところでは年間800名もの学生をとる日本語学科もありますが、北京外国語大学はむしろ少数精鋭で、いまでも年間2、3クラス、100～150名前後です。外国語というものはあまり人数が多くなると成長しにくいんですね。先生と1対1で練習させる時間を作るほうが確実に成長します。北京外国語大学はずっとそのような方針で教えてきています」。

「外国語大学」という名前だが、徐先生はこれからの外国語大学は言語だけに特化するのではなく、外国そのものを広く対象とする教育と研究が必要だと語る。「北京日本学研究中心も日本語だけではなく『日本学』ですから、日本語学、日本文学、日本社会、日本文化、日本経済そして日本語教育の6専攻をまとめて日本学と言っています。これはすべての外国語大学が直面している問題ですが、地域研究と語学教育、さらには、国際関係学部や法学部、国際経済学部、マスコミ関係の学部といったように、地域研究を総合的に研究教育をすることが求められていると思います。英語で言うとForeign Studiesであり、Foreign Language Studiesではないんです」。

## 語学畑と専門分野、 二つのルートから成長する研究者

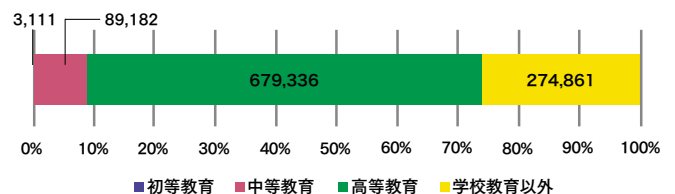
人気の研究分野としては、30年前は、まさに日本経済をモデルにするテーマが多かったが、バブル崩壊以降は日本を教訓とする、あるいは今後迎ろうとする社会問題のひとつとして、高齢化や社会福祉の問題も含めたテーマがある一方で、学生の応募状況から見ると、現代文化の人気の高いのが昨今の傾向だという。

中国語教学研究会（日本語専攻の全国学会）の会長も務める徐先生は、中国全体の最近の傾向として、初等中等教育での学習者数は減っているのだが、逆に高等教育での学習者数が増えていると語る。

「これは世界の中で非常に特色のあるデータでしょうね。たとえば、学習者の数だけで見れば韓国でも90数万人いますが6、7割が中等教育の学習者数です。中国は逆に100万人のなかで67万人が高等教育です。これは世界のどこの国にも見られない状況です。大学で勉強する学生がこれだけ多いということは、そのなかから日本文化理解に繋がる学者を育てる基礎があるということだと考えています」。

ご自身も日本語を学びはじめて50年以上という経歴を持ち、教育者として、多くの日本語学習者・日本研究者を育ててきた徐

2012年度日本語教育機関調査結果 学習者数グラフ



先生は、外国研究者を養成するモデルは、どの国が対象であっても、二つのルートがあると考えているという。

「ひとつは、日本語をまず習う。将来日本語研究者になるとは限らないけれど、習っているうちに日本に興味湧いて、社会でも文化でも、なにか日本について研究する、そのなかから成長する研究者というパターンです。もうひとつのルートとしては、最初は日本とは関係ない。社会学なり文学なり専門分野から勉強して、そのうちに研究対象がないといけなないので、そこから特化して日本社会、日本文学を対象とする。そのように日本研究者として成長するというパターンです。対象国研究者はどの国でも語学畑から成長する研究者と専門分野から成長する研究者という二つのルートがあると思います。センターが養成する学生は前者です。彼らは大学では日本語を勉強していて、センターに入ってから専攻を選んで、成長していく。もうひとつはたとえば北京大学などで、社会学や歴史学の学生が日本を研究する。それぞれに強いところと弱いところがあるんです。語学畑で成長した学生は言葉に強い。研究する場合でも最初から第一次資料で研究することができます。ただ弱いところは最初に専門分野を学んでいないので、しっかりと修士課程から専門分野の再教育や基礎を固めないと広く浅くなってしまいます。語学畑の人はそこを認めないといけません。一方、専門分野から成長した人は語学を後から学ぶことになります。語学は遅く出発するとなかなか成長が遅いんですね。どうしても翻訳された資料を根拠にしてしまいますが、翻訳されたものは翻訳者によって間違いがあるかもしれない。直接資料を読もうとすると意味はわかるかもしれないけれど、言語はその背後の、とくに日本語関係では書いていない部分、文字の裏の部分、そこまで果たして読み取れるかどうか。そこに問題があるんですね。また、直接日本の学者と交流するときには通訳を介さなくてはいけないという弱みもあります。お互いに自分の強みと弱みを認識しながら協力しないといけないと思う。専門分野からの学者から見ると『おまへたちは語学屋でしかない。本当に研究できるのか』と馬鹿にすることもあるかもしれないし、語学畑の研究者からは『おまへたちは翻訳や通訳を通して資料を読んでいるが最初から間違っている』と、お互いに敬遠する傾向があるんですが、むしろ協力して自分のギャップを埋めながら、次の世代の本当の人材を養成したいと考えています」。

### 人材育成は政治・経済・文化の三輪車理論で

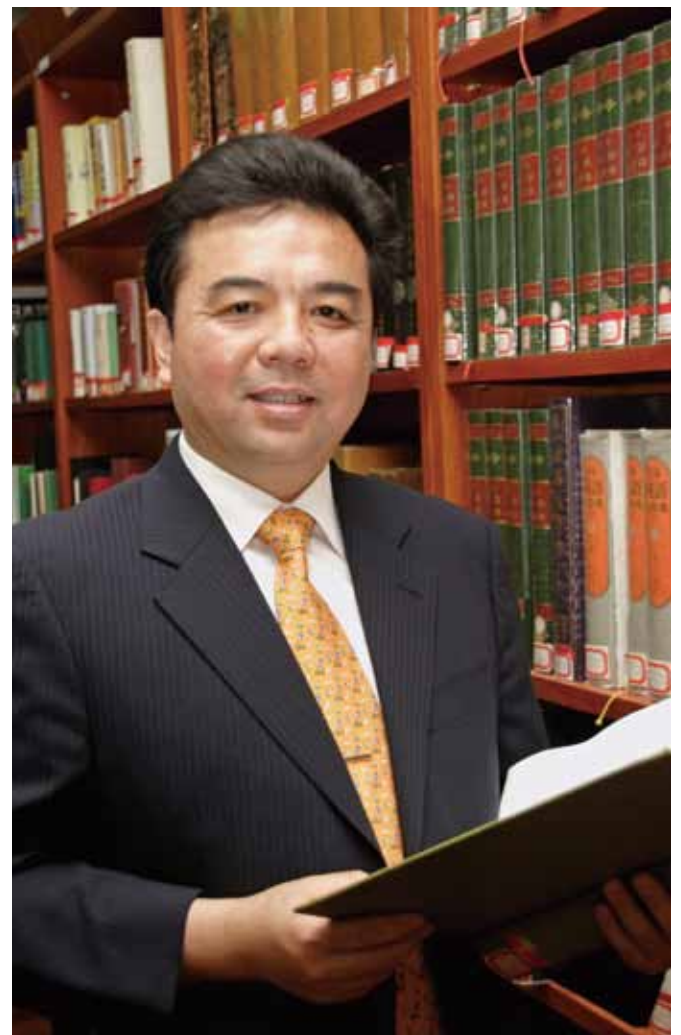
日本語教育はかならずしも語学だけのものではない。最終的には日本語教育を通して、日本研究者、日本文化の研究者を養成することが、日本語教育の本来の目的であると語る徐先生に、「三輪車理論」という独自の考えを伺った。

「政治と経済は二国の関係を支える二輪で、どちらも欠けてはいけませんと言われますが、私はそれだけでは足りないと考えています。たとえば二輪といえば自転車か人力車を想像しますが、一方はスピードを出せない、もう一方はスピードを落とすと倒れる。そこへ『文化』という車輪が加わることによってはじめて安定して早く走れるのです」。そのためには、日本語教育をベースにした、日本文化研究のできる人材を育てることが大切だと考えているのだという。「ただ研究しても、日本語を理解できないと相手の文化を本当にはわからない。日本語教育はかならずしも語学だけのものではありません。道具としての日本語教育をやってもいつまで経っても意味がないのです。日本語教育と日本

研究はいつもペアだと私は主張しています」。日本語教育から文化理解へ。そして、文化理解のある経済研究者、政治研究者となつてはじめて本当の理解と安定した交流が図れるのだという。

### 百聞は一見に如かず

全世界的に文化面への支援が削減される傾向にあるが、人材育成のためには博報財団のフェローシップのような、語学・人文系に的を絞った滞在研究の支援こそが必要だと徐先生は語る。「文科系が肩身が狭いですね。世界的な傾向のようですが、目先しか見ていないと思います。理科系のほうが支援も厚いし優秀な人材も集まりやすくなっていますが、文科系が本当に薄くなって消えてしまうと社会全体が崩れてしまいます。支援した人、教育した学生の価値は、あとから効いてきます。ひとつのハコモノよりずっとずっと値打ちがあるものです。また、いまは情報化社会でその国に行かなくてもインターネット上で資料を集めたりすることが可能ですが、やはり実際に行かないとできないこと、あるいは深く理解できない部分というのがあると思います。『百聞は一見に如かず』というのはいまの時代でも同じです。留学も必要だし、研究者も長期滞在が必要だと思います。通り一遍で見ると日本は全然変わっていないような感じもしますが、長くいると、言葉では説明しがたいような理解ができて、それが自分の研究にフィードバックしてくる。博報財団にはぜひこのフェローシップを続けていただきたいと思います」。



▶徐一平教授（北京日本学研究中心主任・中国日語教学研究会会長・北京外国語大学教授）



▶北京日本学研究中心の2013年度卒業式 写真提供：国際交流基金

### *An Exceptional Collaborative Project Between Japan and China*

The Beijing Center for Japanese Studies was established in 1985 as a collaborative project between the Japan Foundation and China's Ministry of Education. The predecessor of the Center was the "Training Center for Japanese Language," commonly known as the "Ohira School," which Professor Xu Yiping also attended. The School was established based on the Japan-China Cultural Exchange Agreement signed during then Prime Minister Masayoshi Ohira's visit to China in 1979. Specialists from Japan were sent to the School to train Japanese language instructors from across China. Over the five-year period of its operation, the School trained 600 instructors, which represented almost all of the Japanese language instructors in China at the time. The School's success led to its transformation into the Beijing Center for Japanese Studies, which offers postgraduate education.

The collaborative nature of the Center is beneficial in many ways. In its earlier phase, over twenty renowned language specialists per year were sent to the Center from Japan. Today, both Japanese and Chinese faculty members teach courses at the Center, and administrative and academic matters are also managed through collaboration. Many Japanese scholars who have taught at the Center in recent years are specialists on China or comparative studies, and being based in China is advantageous for their own research. Professor Xu Yiping maintains that this project has been one of the most successful and long-lasting examples of cultural exchange between China and Japan, notwithstanding the complicated issues that the two countries have faced over the years.

The Center offers masters and doctoral courses for students who hope to conduct research concerning Japan after studying Japanese language as undergraduates. The quality of the students at the Center is exceptional, as only thirty students are selected out of two to three hundred applicants per year. The Center's library holds the largest number of books on Japan Studies in China (170,000 titles). Students at the Center have opportunities to participate in training programs in Japan, as well as apply to study at any university in Japan as exchange students with funding from the Japan Foundation.

### *The Future of Foreign Studies Universities*

Currently, there are approximately ten universities in China that specialize in foreign languages. Beijing Foreign Studies University is unique among them in that it keeps the size of its student body relatively small, accepting one hundred to one hundred fifty students per year. Professor Xu Yiping maintains that one-on-one practice is important in language studies, and that large class sizes are an impediment to successful language acquisition. He believes that universities specializing in foreign languages should no longer focus on teaching languages alone, but must also lead comprehensive education and research in area studies.

### *Collaboration Among Scholars with Different Backgrounds*

Areas of research concerning Japan that are currently popular in China include aging and social welfare. Among students, contemporary culture has attracted much attention. In China, the number of students studying Japanese is decreasing in the elementary and secondary levels, but is on the rise in higher education. This situation is unique compared to the rest of the world. Professor Xu Yiping believes that the popularity of Japanese language studies at the university level indicates that China has a rich basis for cultivating future scholars who can contribute to a better understanding of Japanese culture.

Professor Xu Yiping points out that there generally are two educational routes that foreign studies scholars take. One route begins with language studies, which later lead students to conduct research on social and cultural topics. This is the route that students at the Beijing Center for Japanese Studies take. The other route is based on the pursuit of various disciplines, such as sociology or literature. Students taking this route learn languages after they choose specific regions as subjects for their research. Both routes have their own strengths and weaknesses. Students with a background in language studies are generally capable of examining primary sources themselves. However, without building a solid basis in disciplinary education at the graduate level, their research remains insufficient in depth. Those who begin with an interest in specific disciplines and study languages later can have difficulty developing sufficient language skills. They may rely on translated materials, or not be able to obtain an in-depth understanding of primary sources. They may also have to rely on interpreters when they communicate with scholars in Japan. "These two types of scholars tend to keep away from each other," says Professor Xu Yiping, "but I would like to promote collaboration between the two, each side complementing the other side's limitations, in an effort to develop a new generation of scholars with real capabilities."

### *Education of Future Scholars with the Three-Wheel Approach*

Professor Xu Yiping maintains that the education of competent future Japan Studies scholars requires the "three-wheel" approach. "It is often said that a relationship between two countries requires two wheels: politics and economy... However, like bicycles or two-wheel pulled rickshaws, a vehicle with only two wheels cannot run fast enough, or it becomes unstable when it goes too fast. A vehicle can run fast and steadily only when it acquires an additional wheel: culture." He believes that education firmly grounded on Japanese language training is critical for cultivating future scholars of Japanese culture. Only with an understanding of culture, he says, will economists and political scientists be able to contribute to building genuine understanding and stable communication among societies.

### *Seeing is Believing*

Observing the global trend of declining support for the field of humanities, Professor Xu Yiping emphasizes the importance of support for field-based research in languages and the humanities, such as the Hakuho Fellowship, which he believes will bring crucial long-term benefits to societies. "Seeing is believing" is still true," he notes, even in the contemporary information society, in which certain research materials can be gathered from afar using the Internet. "There still are things you cannot do, and things you cannot understand at a deeper level, without actually going to the place... Japan may seem unchanging through cursory observations, but living in Japan for an extended period can lead to deeper understandings that are sometimes difficult to put into words. Such understandings contribute to more insightful research. I sincerely hope that the Hakuho Foundation will continue its fellowship program for many years to come."

# 本フェローシップの受入機関

本フェローシップでは、招聘研究者の研究内容・目的に合致した機関で研究を行うことができる。ここでは、7つの受入機関について、それぞれ特徴を紹介する。

The Hakuho Foundation Japanese Research Fellows are affiliated with host institutions with characteristics that match the content and the objectives of their research. This section illustrates the features of the seven host institutions.

## 国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics

第1回より受入開始



東京都立川市緑町 10-2

<http://www.ninjal.ac.jp>

## 世界から見た「日本語」

国立国語研究所（国語研）は2009年10月に大学共同利用機関法人として、あらたなスタートを切った。その際に「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」を掲げて設置された部門が言語対照研究系と理論・構造研究系だ。

言語対照研究系長を務めるブラシャント・パルデン先生は次のように語る。「以前の研究所は、主に、内から見た国語としての日本語が研究対象でしたが、対照研究によって、世界の言語の中での日本語の位置づけ、いわゆる外から見た日本語という視点が加わりました。また、日本語で起きている現象を、世界のほかの言語での同様の現象と対照し、記述や分析を進める上では、様々な言語に通用する共通の抽象的な枠組み（理論）が必要です。そうした理論的背景を持った研究を推進するのが理論・構造研究系と言語対照研究系のミッションです」。主にこの二つの部門を中心に、国際シンポジウムを年に1回開催することを目指しており、世界の中の一言語としての「日本語」という視点で、各地の言語の研究者と共通の土俵で討論する場を提供できているのだという。



国語研は、新たに加わったこの二つの研究系のほかに、日本語の地理的・社会的な変異や歴史的な変化を研究する時空間変異研究系と、現

代語および歴史コーパスの構築と応用を研究する言語資源研究系、また日本語学習者のコミュニケーション能力の習得と評価を目的とする日本語教育研究・情報センターを擁しており、研究者向けの講演会・サロン・シンポジウムを多数開催しているのも大きな特徴のひとつだ。世界中の日本語学・日本語教育の研究者にとって理想的な研究の環境と言えるだろう。

## 国語研にしかない資料

国語研のもうひとつの特徴と言えるのが、言語に特化した図書館だ。言語学関係の蔵書はもちろん、方言や、明治初年から戦後までの国語教科書や、非母語話者のための日本語教科書が網羅されている。流通している書籍よりも、郷土史家による方言の研究書など、書店流通していない書籍を蒐集することを重視している。また、図書館は所属研究員以外にも開放しているという。

## 日本語のグローバル化を目指して

現在、パルデン先生は「基本動詞ハンドブック」というインターネット版の辞書の開発を、日本全国の30名ほどの研究者とともに進めている。マウスだけで使用できる仕組みで、海外で日本語キーボードがない場合にも使えるものだという。ネットの利点を活かして全ての例文にサウンドファイルをつけているため、母語話者の教師がいないような地域でも、ネイティブの発音とイントネーションがわかる。



▶パルデン先生らが開発に携わった基本動詞ハンドブック [verbhandbook.ninjal.ac.jp](http://verbhandbook.ninjal.ac.jp)

「たとえば、ひとつの動詞はプリントアウトすると30ページほどの分量になります。紙の辞書では考えられないことです。紙の辞書では考えられないことが、ネットにはいくらでもスペースがあり

ます。一緒に開発している先生方には、制限なく書いて欲しいと言っています。スローガンは『いつでも、誰でも、どこでも』。夜でも朝でもいい、日本語の母語話者でも日本語学習者でも、インドでもヨーロッパでもビーチで研究してもいいんです。ボーダーレスに、なんのバリアもなくすることで、日本語のグローバル化は可能です」。

日本語教育研究・情報

センターの迫田久美子先生は国語研を「たくさんの栄養素がいちどに採れるマルチビタミンのような研究所」と語る。大学であれば、学部を超えての連携がなかなか容易ではないところだが、国語研は規模が小さいという利点を活かして、研究系間、プロジェクト間で連携しながら研究を進められるのだという。また、国内外でさまざまな経験を積み、広いネットワークをもつ研究者が所属するため、その豊富な経験を自分たちの研究に活かせるのも特色だそう。2016年1月には当センター主催で、「学ぶ」「教える」「評価する」の3領域における最新の話題を取り上げた国際シンポジウムも開催された。



## Global Perspectives on Japanese Language Research

Since its conversion to an inter-university research institute in 2009, the National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL) has pursued comprehensive research on Japanese language from the comparative perspectives of languages around the world, particularly at the newly established Department of Crosslinguistic Studies and the Department of Linguistic Theory and Structure. Along with the Department of Language Change and Variation, the Department of Corpus Studies, and the Center for JSL Research and Information, NINJAL provides an ideal environment for scholars of Japanese language and Japanese language education.

As a part of the effort to “globalize” Japanese language, the institute is creating an online dictionary of basic Japanese verbs, which can be navigated without a Japanese keyboard, and offers sound files for all sample sentences to assist in the learning of native pronunciation and intonation. NINJAL’s library specializes in languages, and allows public access to valuable resources concerning linguistics and textbooks on Japanese language, many of which are not available commercially and are difficult to access elsewhere. Scholars at NINJAL have an extensive research network within and beyond Japan, and the relatively compact size of the institute facilitates cross-disciplinary collaborative research.



# 国際日本文化研究センター

International Research Center for Japanese Studies

京都府京都市西京区御陵大枝山町 3-2

<http://www.nichibun.ac.jp>

## 知見を深める共同研究で、 研究の幅を広げる

第 9 回より受入開始



国立の大学共同利用機関である、国際日本文化研究センター。

招聘研究者の受入窓口となる海外研究交流室では、受け入れの手続きから研究上の相談、滞在期間の日常生活の相談まで、一貫して対応を行っている。

招聘研究者は「外来研究員」の資格で研究を行う。海外から来た研究員のための宿泊施設「日文研ハウス」もある。

同センターが最も重点を置く「共同研究」では、ひとつのテーマを、社会学や言語学、歴史学、文学など様々な分野の研究者同士で議論することで、それぞれの専門が相対化され、より多角的な知見が得られる。

さらに各種セミナーや講演会など、研究者同士や、地域との交流を深める機会が多い。研究の場を越えた人脈拡大を重視するこうした方針により、招聘中に新しい研究テーマを発見する研究者も多い。

最近では、漫画や現代音楽、日中医学史な

ど様々な分野の研究者が海外から集まっている同センター。招聘研究者には、学术交流を通じた研究者同士の切磋琢磨と、海外での日本研究の発展を期待しているという。

## *Expanding the Breadth and Depth of Research through Collaboration and Cross-Disciplinary Exchange*

The International Research Center for Japanese Studies is a national inter-university research institute. The center's primary focus is on collaborative research, in which scholars of diverse disciplines examine shared themes, producing comparative and multilateral knowledge. The center values networks beyond research contexts, and offers abundant opportunities for interaction among scholars and with local residents. The center encourages scholarly exchange and friendly rivalry among researchers, and hopes for the further development of Japanese Studies outside Japan.

# お茶の水女子大学

Ochanomizu University

東京都文京区大塚 2-1-1

<http://www.ocha.ac.jp>

## 海外の日本語教育研究者に 寄せる期待

第 4 回より受入開始



かねてより、日本語教育研究に重点を置いているお茶の水女子大学。とくに東南アジアや中東欧など、今後の日本語教育研究の発展

が期待される地域の研究者に対し、来日滞在による研究の深化を期待しているという。

招聘研究者には、学内に研究室が用意され、希望に応じて、キャンパスに併設された单身宿舎に入居することが可能だ。また、期間中の公開講演会での発表、国際合同授業への参加などを通じて、同大学の教員との情報ネットワークも強化されている。アットホームで密度の高い交流環境は、これまでの招聘研究者からも評判が高い。

こうした交流は、招聘期間終了後の研究者同士のネットワークを形成し、さらに大学同士の国際交流協定締結などの国際交流の促進にも寄与しているという。同大は「グローバル人材育成推進事業（全学型）」に採択されており、今後さらなるキャンパスのグローバル化が推進されていく見通しだ。

今後も本フェローシップを通じ、海外での

日本語教育研究の発展と、世界規模の交流拡大を期待しているようだ。

## *Supporting Foreign Researchers for the Future of Japanese Language Education*

Ochanomizu University has promoted research on Japanese language education for many years. By assisting foreign scholars conducting research in Japan, the university hopes to enhance the development of the field, particularly in the regions where there are prospects for future growth of the discipline. The university supports fellows by providing offices, organizing public lectures and international joint classes, and facilitating networking with faculty members. These efforts have expanded scholarly networks and have led to institutional partnerships with universities abroad.

# 東京外国語大学

Tokyo University of Foreign Studies

東京都府中市朝日町 3-11-1

<http://www.tufts.ac.jp>

## 世界各国の多様な視点による日本語・日本学研究

第 6 回より受入開始



日本有数の外国語大学である東京外国語大学は、日本語を含む 27 専攻語・地域につい

での教育研究体制を擁する。招聘研究者の受入先となる国際日本研究センターは、国内外における日本語学習者の多様化に対応した日本語教育の推進に寄与するため設置された。日本語、日本学、対照研究等を行う部門とプロジェクトグループで構成されている。

招聘研究者には、受入担当教員の指導のみならず他のセンター教員の授業やゼミの聴講、資料提供、常駐スタッフによるニーズ対応など、積極的なバックアップ体制が取られている。

同センターでは年間に多くの国際シンポジウムや講演会、研究会などを開催。とくに国内外の講師を招いて行う夏季セミナーは好評だ。また、プロジェクトや協働研究を通して、研究者同士のネットワークづくりも進めている。

招聘研究者には、従来の日本語・日本学研

究を踏まえつつ、独自の視点に基づいた研究を期待するとともに、多くの研究者との交流によって、自らの研究を進展させていくことを願っているという。

## *Promoting Research on Japanese Studies through Diverse Perspectives from around the Globe*

Tokyo University of Foreign Studies boasts education and research on 27 languages and geographic regions. The International Center for Japanese Studies promotes Japanese language education, serving the diverse needs of students of Japanese language in and outside Japan. Fellows can attend classes, obtain materials for their research, develop scholarly networks through projects and collaborative research, participate in international symposiums and workshops, and develop creative research through the interaction of diverse perspectives.

# 立命館大学

Ritsumeikan University

京都府京都市北区等持院北町 56-1

<http://www.ritsumei.jp>

## 先進的研究機関で、 学際的な日本文化研究を

第 10 回より受入開始



グローバル研究大学を目指し、2014 年には文部科学省の「スーパーグローバル大学創成事業」にも採択された立命館大学。

人社系分野で、特に先進的領域の研究機関として注目されるアート・リサーチセンターでは、京都を中心とした伝統文化研究や、文化財のデジタル・アーカイブ化などが行われる。文理融合型の研究手法を用いて、デジタル・ヒューマニティーズの日本における重要研究拠点となっている。京都にいながら海外の美術館や研究機関と共同プロジェクトを展開できることが特徴だ。

文学研究科では、これまで海外の日本研究者を多く受け入れてきた。日本研究のセクションを持つ海外の研究機関、大学と連携したプロジェクト研究や、国際シンポジウム、ワークショップ開催も多数の実績がある。今後、日本研究に特化した独自の研究体制の充実と、海外との連携を活かした本格的な日本研究の機関としての活動を志向するという。

招聘研究者は、「客員協力研究員」として、

同大学の教員と同程度の便宜供与が受けられる。4 月には、研究設備も整った平井嘉一郎記念図書館が開設した。伝統とテクノロジーが融合した研究機関は、招聘研究者が行う日本文化研究の幅を広げてくれるに違いない。

## *Interdisciplinary Research on Japanese Culture at a Progressive Research Institution*

Aspiring to become a global research institution, Ritsumeikan University has collaborated on numerous projects with research institutes and universities abroad. Its Art Research Center has become an important hub for digital humanities projects in Japan, developing digital archives of cultural assets and conducting research that merges the methods of the humanities and the sciences. This innovative research institution, where tradition and technology converge, is sure to expand visiting scholars' breadth of research on Japanese culture.

# 早稲田大学

Waseda University

東京都新宿区西早稲田 1-7-14

<http://www.waseda.jp>

## 国内最大規模の 外国人研究者受入体制

第 4 回より受入開始



日本を越え、世界に通用するグローバルユニバーシティを目指す早稲田大学。創立当初から留学生を積極的に受け入れてきた歴史を

持ち、現在では毎年約 200 名を越える外国人研究者を受け入れている。専属スタッフによるサポート体制と、宿舎や研究室など、都心のキャンパスでの研究に関わる環境を整え、さらなる外国人研究者の受入体制の整備を進めているという。

招聘研究者の受入手続、寮や研究室等の手配を行う同大の国際部国際課では、外国人研究者交流会や、日本文化を体験できる機会を企画するなど、コミュニティ作りと情報交換がしやすい環境を用意している。

本フェローシップでは、日本語教育研究科、又は文学研究科が受入先となる。招聘研究者には滞在期間中、身分証明書や個人メールアドレスが付与され、図書館などの資料やデータベースへのアクセスが可能となる。とくに人文系では、国内外の貴重な演劇・映像資料を集めた演劇博物館を目的に来日する研

究者も多いという。

国内最大規模の大学ならではの、外国人研究者へのサポート体制で、快適で充実した研究環境が期待できるだろう。

## *One of Japan's Largest Hubs for International Researchers*

Waseda University aspires to become one of the world's leading global universities. Having welcomed scholars from abroad since its establishment, the university accepts over 200 international scholars every year. Fellows can access the university's libraries and databases, including its valuable collections of theatre and visual materials. Networking and cultural events are held regularly to facilitate community-building and scholarly exchange. The university's well-equipped structures of support provide international scholars with a comfortable and productive research environment.

# 京都大学

Kyoto University

京都府京都市左京区吉田本町

<http://www.kyoto-u.ac.jp>

## 伝統と独創性が両立する 学風のもと、充実した研究を

第 9 回より受入開始



京都府内に 3 つのキャンパスを持ち、自由の学風と卓越した研究成果で知られる京都大学。2014 年に打ち出した「WINDOW 構想」

では、研究・教育・国際貢献における目標を定め、グローバル化を推進している。

自然科学、人文・社会科学の全分野を通じて、京都という土地に根付いた文化や伝統と最新の学術研究がクロスオーバーする独創性の高い研究を行っている。

近年では、複数の学問領域を横断する教育研究プロジェクト「ユニット」作りも活発に行われている。部局の枠を超え、様々な分野の研究者が集うことで、複層的なつながりが生まれているという。もちろん招聘研究者も参加可能だ。

日本学研究者にとっては、京都大学に所蔵された資料に直接触れられるメリットも大きいはずだ。

招聘研究者は、学内で研究活動を行うにあたり、学内施設や Web 上でデータベースが利用できる正式な身分を与えられる。生活支

援や日本語能力向上のためのサポートも行われ、スムーズな滞在研究が可能となる。

培ってきた伝統と、独創性を尊重する校風。京都大学での滞在研究は、自身の研究を深化させるであろう刺激に満ちている。

## *Productive Research in an Academic Environment where Tradition and Originality Coexist*

Kyoto University has made special efforts to expand its global dimensions in recent years. Research conducted at the university is highly innovative and unique, intersecting cutting-edge academic research with culture and tradition nurtured in the historical city of Kyoto. Fellows can access library resources and databases, join cross-disciplinary research units, and receive support for improving Japanese language skills. Kyoto University's rich tradition and promotion of originality are poised to inspire and add depth to visiting scholars' research.

# 第12回から受け入れを開始する研究機関

これまでに紹介した7機関に加えて、第12回フェローシップから受け入れを開始する研究機関を紹介する。

In addition to the seven institutions currently hosting Hakuho fellows, the Japan Foundation Japanese-Language Institute, Urawa will begin hosting Hakuho fellows in 2017. This section illustrates the characteristics of the Institute.

## 国際交流基金 日本語国際センター

The Japan Foundation Japanese-Language Institute, Urawa



埼玉県さいたま市浦和区北浦和 5-6-36  
<https://www.jpf.go.jp/j/urawa/>

### 長年の日本語教師研修 機関の実績を土台とした 研究環境

本フェローシップで、第12回(2017年6月募集開始)から受け入れを開始する国際交流基金の日本語国際センター。国際交流基金が「文化芸術交流」「日本研究・知的交流」「海外における日本語教育」という3つの柱を持つなかで、日本語国際センターは日本語教育事業の一翼を担っている。同センターは主として日本語を母語としない海外出身の日本語教師を年間約500名招聘して、日本語・日本語教授法・日本事情の研修を行い、日本語教育あるいは言語教育に関する最先端の情報を提供する。平成元年の設立以来、1万人以上の研修参加者を送り出した実績を持っている。教師がそれぞれの現場で直面する教育上の課題について、解決法を検討し自力で解決する力を育成することを目的に行っている研修では、教授法研究、シラバス開発、教材作成計画といった研究テーマを持つ教師が多いそうだ。



▶生け花や茶道のデモンストレーションが行われる而学堂

### 研究から生活まで こまやかにサポート

日本語国際センターには、日本語教育関

係を専攻した修士以上の学位を有する専任講師が30名以上在籍しており、招聘研究者それぞれの研究内容に合ったサポートをする体制が整っている。図書館は、日本語教育に特化し、世界各地で使用されている日本語教科書や日本語教授法の関連図書が充実しているのが特徴だそうだ。また、ここを通じて全国の大学図書館を利用することもできるという。センター内で毎年研究プロジェクトを募集し、年に数回研究会や発表会が開催されているほか、国立国語研究所や、政策研究大学院大学、お茶の水女子大学と連携して、イベントを共催したり、共同研究を行える体制を整えているという。

また、本フェローシップでの研究者が日本語国際センターで研究する際には、研究室や図書館、ホールなどを擁する管理・研修棟に併設されている宿泊棟内の宿泊室が利用できるため、時間を効果的に使って研究を進めることができる。ハラルフードやベジタリアンメニューなどにも対応した食堂も利用できるほか、娯楽室やテニスコートなども備えている。管理スタッフが24時間常駐しており、生活面でのサポートも万全と言えるだろう。



▶多彩なメニューが提供される食堂。さらに自炊室も用意されている

### アクション・リサーチを 重視する

日本語国際センターでは、その特性から、日本語教育の研究者を受け入れの対象としている。なかでも教育実践の現場からテーマを探しだして、研究成果を最終的には現場に還元する、教育実践研究＝アクション・リサーチを推奨するという。「教材開発や学習者研究はもちろん、研究そのものは現場と直接関係しないことでも、その



▶「限られた時間と使用できるリソースを見分けて、自身の研究に集中してほしい。サポートは惜しみません」と語る西原鈴子所長

研究成果が短期的あるいは長期的に見て、現場の改善に効果を持つという種類の研究が、この機関における研究の特色だと言えます」と所長の西原鈴子先生は語る。自主的で柔軟な研究生生活を送るサポートを惜しまないという当センターの姿勢は、研究者にはもちろん、日本語教育界全体にとっても大きな利益を生むだろう。

### Research at a Well-Established Training Institute for Japanese-Language Instructors

The Japan Foundation promotes arts and cultural exchange, Japanese studies and intellectual exchange, and Japanese-language education overseas. The Japanese-Language Institute, Urawa contributes to the Japan Foundation's efforts in the field of Japanese-language education, and will begin hosting Hakuho fellows in 2017. (The application period will commence in June, 2016).

Every year, the institute welcomes approximately 500 Japanese-language instructors from overseas, and offers them training programs on Japanese language, teaching methods, and Japanese current affairs. Over thirty full-time instructors with postgraduate degrees support scholars with various research topics. The institute's library specializes in Japanese-language education, and holds large numbers of textbooks and publications on teaching methods collected from across the world. The institute is building collaborative relationships with universities and research institutes to conduct joint research and events. The dormitory is conveniently located in the building that houses the library and various other research facilities. A cafeteria and sports and entertainment facilities are also on-site.

The institute promotes research rooted in educational practices with practical application in classroom settings. Its philosophy of providing full support for scholars to conduct independent and flexible research will benefit not only the scholars who come to the institute, but also the field of Japanese-language education in general.

世界における日本語・日本語教育研究および日本文学・日本文化研究の拡大、振興を図ります。

# 博報財団「国際日本研究フェローシップ」

この事業は、海外で日本語・日本語教育・日本文学・日本文化に関する研究を行っているすぐれた研究者を日本へ招聘し、滞在型研究の場を提供することで、世界における日本研究の基盤をより充実させ、日本への理解を深めることを目的としています。

Advancing international research into the Japanese language, Japanese language education, Japanese literature and Japanese culture.

## Hakuho Foundation Japanese Research Fellowship

### 【対象となる研究】

- 日本語研究
- 日本語教育研究
- 日本文学研究
- 日本文化研究

### 【第12回応募資格】

海外在住の日本語・日本語教育・日本文学・日本文化の研究者

(下記の全ての条件を満たす者)

- 高等教育機関・研究機関に所属していること (PD・非常勤を含む)。
  - 博士の学位を取得している (取得見込みを含む) 研究教育歴が豊富な学者・研究者。
  - 日本語で研究を遂行するのに十分な日本語能力を有すること。
  - 日本以外に在住し、日本以外の国籍を有すること。あるいは、日本国籍で日本以外の国におおむね 10 年以上在住し、当該国の学会などで活躍していること。
  - 招聘期間中継続して日本に滞在することが可能であること。
- ※ 博士論文執筆を目的とした応募はできません。  
※ 博士号取得見込みの方は 2017 年 3 月末日までに取得する必要があります。  
※ 研究報告および事務局との諸手続きのコミュニケーションは全て日本語で行うため、十分な日本語能力が必要です。  
※ 過去に日本招聘研究プログラム等で助成を受けた方でも応募可能です。

### 【助成の内容】

- 渡航費、滞在・研究費、住居費など日本での研究に必要な経費を助成します。
- 研究期間は長期 (12 ヶ月) と短期 (6 ヶ月) が選択できます。
- 年間の招聘研究者数は 15 人程度の予定です。

### 【来日中の研究活動】

下記のいずれかの受入機関の協力を得て、研究を行います。

- 国立国語研究所
- 国際日本文化研究センター
- 国際交流基金 日本語国際センター
- お茶の水女子大学
- 京都大学
- 東京外国語大学
- 立命館大学
- 早稲田大学

詳しくは、下記ホームページをご確認ください。

<http://www.hakuhofoundation.or.jp/>

### 本フェローシップに関するお問い合わせ

博報財団「国際日本研究フェローシップ」事務局  
〒105-0012 東京都港区芝大門 2-1-16 芝大門 MF ビル B1 階  
(株)イーサイド内  
TEL: 03-6435-8140 / FAX: 03-6435-8790  
Email: ip-office@hakuhofoundation-ip.jp

**博報財団**  子どもたちと、未来のあいだに  
HAKUHO FOUNDATION

### Eligible research

- Japanese language
- Japanese language education
- Japanese literature
- Japanese culture

### 12th Eligible researchers

Researchers working in the fields of Japanese language, Japanese language education, Japanese literature or Japanese culture who reside outside Japan and meet all of the criteria below.

- Affiliated with a higher education or research institution (including postdoctoral scholars, adjunct professors and part-time lecturers)
- Scholar or researcher with (or soon to be granted) a doctoral degree and an extensive research or education background
- Sufficient Japanese language ability to be able to conduct research in Japanese
- Non-Japanese national residing outside of Japan or Japanese national who has resided outside of Japan for 10 years or more and has been active in the academic community of the country of their residence
- Able to stay continuously in Japan for the duration of the Fellowship period

Notes:

Applications are not sought from those whose purpose is to write a doctoral thesis. Applicants who will soon receive their doctoral degree must receive it by no later than March 31, 2017.

As research reporting and communications with the Fellowship secretariat on various procedures will be conducted in Japanese only, a suitable level of Japanese language ability is required.

Those who have previously received support for residential research in Japan may also apply.

### Fellowship content

- Invited fellows will have their airfares, living and research expenses, housing and other expenses necessary for conducting research in Japan covered
- Long-term (12-month) and short-term (6-month) fellowships are available
- Around 15 fellows will be invited each year

### Receiving organizations

Invited fellows will conduct their research with the cooperation of one of the following receiving organizations:

- International Research Center for Japanese Studies
- The Japan Foundation Japanese-Language Institute, Urawa
- Kyoto University
- National Institute for Japanese Language and Linguistics
- Ochanomizu University
- Ritsumeikan University
- Tokyo University of Foreign Studies
- Waseda University

### Refer to the Application Guide for full details

<http://www.hakuhofoundation.or.jp/english/>

### Contact

Hakuho Foundation Japanese Research Fellowship Secretariat  
c/o e-side, Inc., B1 Fl., Shiba-Daimon MF Bldg.,  
2-1-16 Shiba-Daimon, Minato-ku, Tokyo 105-0012, Japan  
Tel: +81-(0) 3-6435-8140 Fax: +81-(0)3-6435-8790  
Email: ip-office@hakuhofoundation-ip.jp

発行日: 2016 年 6 月 10 日

発行: 公益財団法人 博報児童教育振興会

編集: 早稲田文学編集室 窪木竜也 北原美那 朴文順

編集協力: 早稲田大学 十重田裕一 市川真人

翻訳・英文編集: 常田道子 デザイン: 奥定泰之 (オクサダデザイン)